

編集後記

昨年10月より編集委員に加えて頂きました。私自身、新天地に赴任して1年半経過し時間的余裕ができたことから編集委員をお引き受けすることにしました。投稿し査読して頂く側から査読、評価する側になったことに緊張感を感じております。論文を書く際、英文なら世界中で読まれ、さらにインパクト・ファクターが付き業績となるため、英文誌に投稿する人が多い傾向があります。これは当然と言えば当然な流れであり、実際、消化器外科学会でも Digestive Surgery が英文誌になっている訳です。日本語で書かれた学会誌はどのような役割をこれから担うべきなのか考え直す時期にさしかかっているのです。そんな感慨を抱きながら、初めて編集会議に参加した時、内容がある質の高い学会誌を会員の方に提供するために多くの努力が払われているのを目の当たりにし、感激しました。特筆すべきは編集委員の先生方の顔ぶれです。消化器外科各分野の錚々たるメンバーが集結しております。査読に際しては、著者の先生が一生懸命仕上げた論文ですから、査読する側も失礼のないよう真摯な姿勢で読みます。その結果を基に、二人でペアになって評価するわけですが、たまに査読結果が大きく異なることがあります。査読の仕方が不十分だったのかとか緊張しながら、査読評価を比較し、時にペアの先生と議論を交わします。査読結果の相違点をみて、なるほどこういう見方もあるのかと勉強にもなります。編集委員会は東京大学胃・食道外科上西教授の司会で手際良く進行し、厳しくも温かみのある議論が展開されます。新参者の私には大変な勉強となります。編集委員になって学会誌を手にするのと今までと違った喜びがこみ上げてきますし、学会誌を見る目も変わりました。どの学会誌でも同じ過程を経て作成されている訳ですが、消化器外科を志す外科医にとって読んで必ず為になる内容であると確信しております。

4月より診療報酬も改定され、その内容は外科系医師にとってますます厳しいものとなっております。そして、さらに質の高い医療が求められています。時間に追われ忙しい日常臨床の中でも最新の知識を得ることが要求されるわけで、コンパクトに up-to-date の知識を得るのに最適の学会誌を目指すべきではないかと考えています。これからも会員の皆様と一緒に日本消化器外科学会誌の新たな役割を模索して行きたいと思えます。

(窪田 敬一)